

(◎) シヨツベンハウエルの女子に就いて
の論文と、ラスキンの「セサム、アンド、リリース」中の「リリース、オブ、クワインス、ガーデンス」とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ。(承前)

文科四年生 千葉安良

(2) ラスキンの「リリース、オブ、クワインス、ガーデンス」「リリース、オブ、クワインス、ガーデンス」は、ラスキンが、一八六四年の十二月に、マンチエスター市で行つた講演である。女子は如何なるものか、その教育は如何にすべきか、女子の職分は如何あるべきものか、といふ三點に就いて述べたものであつて、全體は三段に分れて記述されて居る。

第一、(先づ最初には、女子の位置及力はどうか、即ち女子とは如何なるものかといふ女性論を示してある。)

よく導かれた道徳的教練と、よく撰ばれた書にはどうしたらよいかといふことをきめることは出來ない。然るに今日の世では、此の社會の幸福と根本的の關係のある重要な問題に就いてするぶん亂暴な言論や、無益な空想が縦にせられて居る。男性と女性との關係及びその智性德性等の差違といふやうな事に關しても、なほ意見は區々であつて、女子の使命やその權利は、男子のそれとは全然別々のものであるかの如くに云はれたり、又、女子と男子とは種類階級の異つた者であつて、相互の間には到底調和し難い要求の存して居るやうに言はれたりする。これは少くとも誤謬である。又同様に否、も少し多く馬鹿氣た誤謬もある。それは女子をその良い影像若しくは扈從者の如く見做し、女子は男子に對して、無思慮に隸屬的に服從すべきであるといふ考である。これは男子の助力者優秀なる剛勇によつて、全く支持せらるべきものである。女子は纖弱なものであるから、男子の「ヘルブメート」であるべくつくられた女子に對しての思想として、最も馬鹿氣たものではある

籍の讀習とは、人をして不徳者や無學者の上に王者の如き力を有せしめるものである。その王者の力といふのは、物質的の勢力や、外觀の莊嚴を有する所謂王權でなくて、穩靜な慈愛に満ちた力、一層強固な道徳と、一層眞實な思慮に基づきを置くものである。この真正なる王權は

獨り男子のみに與へられるのではなくて、女子にも與へられる。但し、女子ではこれを真正なる女王之力 (true queenly power) と云ふべき

で、女子がこの女王の力を正しく所有し、正しく使用すれば、女子の在る至る所に秩序と完美とを保ち得る。それ故その感化の及ぶ範囲は、これを女王の花園 (Queens Gardens) と稱へてよいと思ふ。

我々は、女王の眞の力は如何であるかをきめるには、先づ女子の普通の力 (ordinal power) は如何であるかと云ふことを知らなくてはできない。又我々は、女子が女性として盡すべき真正永久の義務は何であるかを決定しなくては、教育によつて其の義務に適應した女性を仕上げる

まいか。これでは男子は自己の影像として見るべき、又は奴隸として使役すべき女子に助力せられるのが相當だと云ふことになるのではない

か。

さて、然らば吾人は、男子と關聯して女子の心情と德性とは如何なる力及び職務を有するか又正當に解釋せられた男女の關係は如何に兩者の強み、名譽、尊嚴を扶植し増加するか、といふことについて明瞭な何人も争ふべからざる考は得られないものだらうか。元來吾人の教育の第一の用は、吾人が或る困難な問題に遭遇した時に、古來の最も賢い最も偉い人に相談に行くことが出来るやうにさせるのであつて、それは即ちその人の著書によつて、目下の事件の判断を得るのにある。自分は今それを此處に行はうとする。昔からの偉人賢人は、女子の眞の品位は何處にあるか及び、女子が男子を助けるのは如何なる形式によつてすべきであるかを、どう考へたであらうか。私はそれを研究して見たい

(彼は斯う言つてそれから、シエクスピア、

スコット、ダンデを始め、チヨーサー、スペンサー、エスキラス、ユーリピデス、ホーマー等、各國各時代の詩人文豪が、その作品に於て、如何に女性を觀、如何に描き出して居るかを語つて、その内に女子の本分を暗示して居る、今そのごく大体をのみ記せば)

シェクスピアの書いた澤山の劇の中には、完全な性格を備へた男主人公は一人も無い。たゞ完全な性格の女主人公のみがある。オセロ、コリオラナス、シーザー、アントニオ、ハムレット、ロメオ、ケント、オーランドー、みな何處か不完全の點が性格上に存して居る。これに反して、コルデリア(キンギリー劇)、ラスデモナ(オセロ劇)、イサベラ(しつべい返し劇)、ハーマイオン及バーデタ(冬物語劇)、イモーベン(シムベリン劇)、カザリン女王(ヘンリイ八世劇)、シルビア(ロペナの二貴人)、ヴィオラ(第十二夜劇)、ロザリンド(御意の儘劇)、ヘレナ(めでたし)劇)、バージリア(コリオラナス劇)等はみな完全な性格である、人類の最高英雄の標

式(Highest Heroic type of Humanity)として承認せらるべきものである。沙翁の各劇にあらはれる悲劇は、常に男子の痴愚と缺陷とに由つて惹き起されるので、若し、これらの慘事が幸に回復せられ、眞滿に極を結ぶ事があれば、それは皆女子の聰明と徳行とに由るのである。(例が挙げてあるが省く)然しシェクスピアも品性の高いムレット劇は弱い婦人である。彼女はハムレットを慰藉することが出来なかつた。そしてハムレットが危急に臨んで最も彼女の助力を要する時にあたつて、その指導者たることができなければ、遂に彼を誤らしめて、その後のあらゆる惨劇を惹きおこした。マクベス夫人(マクベス劇)や、レガン、ゴチル(キング、リオア劇)等は人倫の常規を逸した女であつて、例外の婦人として描かれたことは明かである。

以上は人生に於ける女子の位置と性格とに對してシェクスピアの興へた公明な光輝ある例證である。彼は常に女子を男子のために眞實な愛の情を濺いでは居ない。しかも彼女は彼れを戀愛詩である。彼の精神を生涯見守つて居た美しい女性に對する讃美の詩である。ポルチナリの心は、單にダンテに對する温い同情(愛憐の情)に止つて居て、決してダンテに對して戀愛の情を濺いでは居ない。しかも彼女は彼れを破滅から救ひ、地獄から救つて居る。彼は常に失望の地にさまよつた、その時にいつも彼女は天國から彼の救助に來た。そして彼が極楽に昇天するに至るまで、生涯を通して彼の教師であつた。彼れを鞭ち鞭ちして光明の方へ光明の方へと導いて、遂に彼れに神と人との最も知り難い真理を教へたのであつた。

ギリシアの文學に於ける女性も亦、高尚な女王的性格を備へて居る。有名な悲劇詩人ユーリピデスの傑作アンドロマック劇の女主人公アンドロマックの、母として妻としての單純な美しい心情は、人間の有する眞及美の理想的標式と

聰明な相談相手として、又正義と純潔との模範として描寫して居る。彼の劇に於いて、女子はつねに難局を神聖化する。たゞそれを救ひ得ない時であつても、必ず一縷の純潔崇高な閃きを、事件の中に透し込むのである。

スコットの描いた女性は(舉例は省く)無限の優しさ柔らかさと、明らかな智性との中に、全く犯し難い品位と正義とを備へて居て、又少しの恐怖躊躇もなく敏捷に倦怠することなしに、自己犠牲を行つて居る。義務によつてすらしく見える行爲も、多くはその内心からの眞の美しい要求によつて、立派な犠牲を行つて居るのである。そして更に、その深く抑制した愛情の忍耐づよい智性は、その戀人を瞬間的の過失から救ふのは勿論、價値なき愛人の性情を鼓舞し向上させて、その話の終りに行く頃には、次第に立派な性格を形づくるやうにさせるのである。

シェクスピアの考でも、スコットの考でも青年男子を導き數へ見守るのが女子であつて、

して仰がれて居る。ホーマーのオデッセーの中のアルシナス王の娘ノーシケアの無邪氣な親切單純な王女の生涯にも、ペネロープの主婦としての沈静にも、ソフォクレスのアンチゴーン劇の、アンチゴーンの恒久不撓の忍耐と獻身的の孝悌にも、又ギリシアの古傳説に有名な、彼のトロイへの順風を祈るためにアルテミスの犠牲に捧げられたアガメノンの娘イフィゼニアの柔和沈默にも、如何にも女性の美しさが知られるではないか。最後に力強い例として舉くべきはアルセチスである。この婦人はその最愛の夫アドメタスの大患を治したいがためにアポロの神託に従つて、自ら死の苦痛を忍んだ。而してこの古傳説に於いて、彼女はハーキュリスによつて救はれて再び生命を得た。アルセチスの此の犠牲の心は、當時のギリシア人をして、至誠の愛は死したる人をも蘇生せしむるものとの信仰を得しめたのであつた。

更に神話時代に遡つて觀る。全世界の立法者モセスは埃及王バウロの娘、即一女子によつてとのやうに思はれるが。世間では婦人は指導者では無いのみならず、彼女自身のことさへ考へない者とせられて居る。男子が常に女子よりも賢い。男子は考へる人、規則をつくる人、智識に於いても判断においても勢力に於いても卓越した者とせられて居る。これは大いに考へねばならぬ重要な問題である。果して此等凡ての偉人や詩聖が誤つて居るか。又は世間の人々が誤つて居るか。シエクスピア、エスキラス、タンデ、ホーマー等は、我々のために單に人形に扮装させて居るのか。否人形よりもなほ悪い不自然の幻像を弄んで居るのではないか。若しこんな幻の考へを現實にしたならば、我々の凡ての家庭に騒亂を來たし、凡ての愛情は破壊せられてしまふのではなからうか。それ故若しこれに就いて考へるならば、我々は最後に人間の心情それ自身によつて與へられた事實の明白さによつて考へるがよいと思ふ。

彼の純潔な教の保たれたクリスト教時代には男子はその愛する婦人に絶對的の服從をなして

教育せられて居る。エシブト人は智慧の靈を表出するに婦人の形跡を以てして、その手に智の標象として梭を持たせた。ギリシア人はこのエジプト人の智慧の神をうけついで、尊信して、アテナの神（ミネルバ）となした。そして此女性の神に對する尊信は、今日に傳り残つたギリシアの文學美術及國民道德を作り出した。

古來女子は斯様にうたはれ斯様に稱へられて居る。さてこれら世界の大詩人大偉人の與へた例證は、果してどれ程の眞價を有して居るか。彼等はその生涯の大事な製作に於いて、男女間の關係を單に理想的に考へたり、又は虛つて發表して、自身の慰みとしたに過ぎないと考へられるかやうか。よし又理想上のこと、想像上のことゝした所で、もしその想像の内容が、實際有り得べきことであるなら、その想像の產も亦好ましいものである。以上の人々の考へは如何か。これを實際にあてはめて見てどうであらうか。若し今日世間普通の有して居る結婚關係の考へから見たならば、殆んど全く希み得ないこ

居た。その服從は單に熱狂的想像上の崇敬ではなくて、如何に若くとも自分の愛する婦人に對しては、判断の困難な問題は全くこれを開陳して判断をきめて貴ふための、眞の服從をなして居た。

騎士道が墮落し濫用せらるゝやうになつてからは、その道は戰時における慘虐蠻行、平時に於ける不正、家庭の腐敗等を産み出した。しかし騎士道の最初に於いては、信仰、秩序、愛情はこれによつて保持せられた。そして此の眞の騎士道に於いてその高貴なる生活の最初には、若き武士はその崇敬する婦人の命令に服從するのを娛しんだ。中世の騎士が、そして戰さの門出の時に、その仕ふる婦人の手によりて、鎧の紐を締めて貰つて出て行つたといふことは、單に當時のロマンチックな流行とのみ見ることは出来ない。これは實に永久不變の眞理の表徵ではあるまいか。女子の手がしつかりとその紐を締めるのでなくては、男子の心の鎧をかたく裝はしむることは出來ない。若しも女子がそれを締

めることをよい加減にしたならば、男子の名譽は直に失墜してしまふのだ。私は我が英國の若い婦人達が次の詩を味はつて下さることをのぞむ。「黄金に勝る寶をば、心の底に秘めながら、そを人知れず徒らに、世にも思慮なく使ひ爲す、女よ聞けよ男子には、物の辨別粗くして、一圖に走る意志の駒、獨り廣野を行くがごと、され天與の智と情の、深さぞ汝が寶にて、其の寶こそ荒駒の、野邊ゆく折の手綱なれ。あゝ斯くてこそ女子の、心の花は咲き匂ひ、猛き獸もそれをめてて、柔しき人と變るべく、人は一しほ高まりて、天つ神とも輝かん」（コヴェントリー、バッドモーテアの詩の一節）（「女子の本分」による）

かやうに述べて來た處で、諸君は戀人同志である男女の關係が如何あるかといふことは、了解せられたと思ふ。併し此處に一つの疑問がある。かやうな關係は人の全生涯を通じて保たれ得べきものであらうかどうか、我々は男女相互の敬愛は、戀人同志であつた時代にのみ成立するものであつて、夫妻の間には成り立たないやうに

する職分であつて、決斷を與ふる職分ではない。

(It is guiding, not a determining, function)

男女兩性は何れが勝れて居るかといふことを兩者を全然同一の立場に於いて、同一類の者であるかのごとくにして、比較して居る人があるが、あれは實に馬鹿なことである。男子と女子とは、お互に他の有たないものを有つて居るのた、そして互に他を完成させ、他によつて完全にさせられるのである。男女の各には、同一な何物もない。お互の完成と幸福とは、互に一方が他から、他のみが與へ得る所のものを受け又求めることに掛つて居るのであらう。今簡単に兩者の性格の異なる點をあげて見れば、次のやうになると思ふ。男子の精力は發動的、前進的、防禦的である。男子は勝れたる「爲す人」である。創造者、發見者、防禦者である。男子の智力は沈想と發明とに長じて居る。彼の精力は冒險戦鬪に適して居る、その戦鬪の正義である。時には勝利の必要な時には何時でも勝利者となるやうに與へられて居るのである。しかし女

思つて居る。即ちこの崇敬と愛情とに伴ふ美はしい尊い義務の念は、男女が互に愛し合ひながらもなほ恥辱の念を有ちとして互の性格がまだ充分に解らない間だけに有するのであつて、すでに兩者の關係が明白になり、又相互の愛情も全く專有し、その性格も悉く知りつくして後に消失してしまふやうに考へて居る。然し、眞に考へて見たならば、これは實に不合理な又卑い思想である。苟も結婚であるならば、その結婚といふものは、男子と女子との間の一時的熱狂的の愛情を永久の愛情となし、瞬間的の盡瘁を恒常の勤務にかへさせるためのものではあるまいか。

さてそれならば、此の女子が男子の指導者たる職分を有すると云ふ考と、眞の妻らしい從順な家婦としての職責を有すると云ふ考とは、果して融和すべきものであるだらうかどうかは、すぐ諸君の問はれる處であらうと思ふ。それ故私は今この女子の力の正當に承認せらるべき所以を明かにしやうと思ふ。但しこれは全く指導

子の力は整理支配に長じて居て、戦鬪の爲めでなくよい整頓判決のために與へられて居る。彼女は物の性質や物の要求やそのあるべき位置や女子は偉大な職分は讃美にある。女子は決してどんな争鬭にも加はるべきでないが、その争鬭の褒賞は誤りなく女子が判定する。そして女子は此の職分と位置とによつて、自身に對する危険や誘惑から保護せられて居るのである。男子は公開の世間に於いての荒い仕事によつて凡ての危険と試練に遭遇はねばならぬ。それ故男子には、失錯したり犯罪を行つたり、避けがたい誤謬に陥つたりすることは、ありがちのことである。彼は屢々負傷し壓制され、冷き雨や荒き風に暴される。そして強硬に鍛錬される。かくして男子は女子を凡て此れ等の災害によつて保護せられた家の内にあつて、よくこれを支配し、これを美しく守つてどんな危険も誘惑も過失も罪惡も入れないやうにする。これが家庭の眞の性質である。かくて家庭は平和の

居處となるのである。家庭は社會の凡ての禍害から避難所である計りでなく、凡ての恐怖や疑惑や不和からの避難所となるべきである。若し家庭に於いてこれが出来ないならば、それはすでに家庭ではない。外界の生活の不安さが家庭の中に入り込んで、お互に相矛盾した心持を持ち、知り合はず愛し合はず、外部世界の敵対の社會を、夫によつてなり妻によりてなり、一步でも家の闘をまたがせたならば、それはもう家庭ではなくなるのである。さうなれば、家は單に外界の世間の一部分を、家根を葺き火を焚いて圍したといふに過ぎない。しかし家庭が竈の神の居所、神聖なる場所とせられて居る以上は、竈の在る所は常に家庭の神によつて守られて居るのであつて、眞の主婦らしい主婦の來る所には何處にも彼女の周圍に眞の家庭がつくられるのである。たゞひ家が貧しくて、御空の星のみが彼女の頭上を飾るものであり、草叢の螢の光が燈火であるやうな境遇でも、なほ彼女の在る所には眞の家庭がある。そして身分の高い婦人

ら翻つてのみ居ると云ふのではなく、又月影に照られた白楊のゆるげる枝のつくる影の如くに變り易いといふのでもなく、たゞ光明それ自身の如く種々になり得るといふのである。たゞ晴朗な和平な天地の間に漲つた光明それ自身の如くに變り易いのである。その光明はその照らす凡てのものに、そのもの自身の色を現はさせ且つそれを立派にするのである。女子はこの光明の如くにあらねばならぬ。

第二、(第一には、女子の教育は如何にあるべきかを語つて居る)。

私は此處まで、女子の位置及び力がどうあるべきかを示した、次に私はこれに對して如何なる教育が女子には施さるべきであるかを研究しよう。若し諸君が、是れ迄述べ來つたことを、眞に女子の職分と品位との眞正の觀念として考へて下さつたならば、これに適當するやうに女子を教育するには如何すればよいかといふことは、容易くお判りになることと思ふ。(斯ういつて彼かれはそれから女子教育上の意見を澤山にの

にとつては、彼女の影響は單に自分の家庭内にのみ止まらないで、遙かに遠く家なき人々までも及ぶものである。私はこれが女子の眞の位置及び力だと思ふ。諸君はこれを首肯せられないだらうか。併しこれを完全に盡くすには、女子は誤なしにゆかれるであらうか。女子が支配する所は何處でも正義の影がなくてはならぬ。それで故女子は忍耐づよく又腐敗することなしに善く、自己拒絶のためであり、又自ら良人の上に坐せんがためでなくして、良人の傍から落ちることのないやうにとの爲であり、又不作法な偏狭無限に價値ある心情の柔らかさを保つためである。この聰明この心情の柔らかさは、無限の事柄に適用し得べきものであり、女子の眞の務に忠實であるために、女子の眞の變り易さを續けるためのものである。「女子は變り易い」といふ偉大な思想は、「風の中なる羽毛の如く」ひらひらせんがためでなくして、良人の傍から落ちることのないやうにとの爲であり、又不作法な偏狭無限に價値ある心情の柔らかさを保つためである。この聰明この心情の柔らかさは、無限の事柄に適用し得べきものであり、女子の眞の務に忠實であるために、女子の眞の變り易さを續けるためのものである。「女子は變り易い」といふ偉大な思想は、「風の中なる羽毛の如く」ひらひ

べて居る。体育、美育、智育、歴史教育、宗教教育、文學教育、自然教育等の各々に就いて、價値ある説を多く書いてあるが、それは、私の此の文では研究しない故すべて「女子の本分」に譲つておいて、最後に述べてある「女子の教育の差異、女子教育の特色といふことを紹介する」私は此の神學に於けるとりのけの外は、女子の教育はその實質においても、進行の順序に於いても、男子のと同じでよいと想ふ。しかし男女の教育は全く異つた方針でせらるべきである。女子は如何なる階級の女子でも、その良人の知ることを好むもの、智識を有して居らねばならぬ。しかし、その知り方は良人の知り方とは異つた知り方でなくてはならぬ。同じことに就いての智識も、男子のは根本的で進歩的であつて欲しい。しかし女子のは普通一通りのことである。そして毎日の有益な助けを完全になし得る程度でよい。固より男子でも、現在の用のため、手取早く間に合はせるために、時にはその學習を女子的の形式で爲ることが、手近な賢い

仕方である事もある。しかし概して言へば、男子は語學でも科學でも根本的に知る必要があるが、女子は同じ語學でも科學でも、その良人又は良人の友達の趣味や娛樂を同情し得る程度に知つて置けばよいのである。けれども私は皮相の上づつた智識でよいといふのではない。確實な基礎の上にある智識と、不確實な基礎の上にある智識とは、大きな相違がある。だから半知りにせよといふのではない。多少誤つてもよいといふのでもない。確實な輪廓、大体の明瞭な了解を得よといふのである。女子は如何に些細なことでも、その知つて居ることによつて、良人を助くべきであるが、半知りのことや誤知りのことは、その良人を助け得ないのみならず、彼れを苦めるのみである。そして若し男女の教育に何等かの形式的の相違があるとしたならばそれは女子は男子よりも速く、六ヶ敷い問題に導いてよいといふことであらう。女子の知性は早熟であつて男子よりも早く深い厳しい問題を考へ得るのである。

にするにある。女子のは、家庭の秩序を保ち、慰安をつとめ、愛情を安定にするにある。そこで男女の各々の國家に對する仕事は、兩方ともこれを擴げて行けばよいのである。國家社會の一員としての男子の務は、その國家社會の維持前進、防禦に貢獻するにある。女子の務は、國家社會の秩序、慰安(幸福)、美はしさのために盡瘁するにある。男子は自家の門戸の前に立つて、若し無禮侮辱毀損に對して必要な時に、それを防ぐにある。それと同様に、否よしその家を捨てゝも、必要のある時分には、國家の門前に立つて、その免れざる務に殉すべきである。同じく女子は家の門内にありて、秩序の中心となり、苦痛の慰安者となり、美の摸範者となねばならぬが、若し女子が、門前に一步を踏みだす時は、その國家に對して同様のつとめを行はねばならぬ。しかしその時には、秩序を正しく守ることは困難で、苦痛はもつと切迫し、愛は甚だ稀であることを覺悟せねばならぬ。そして如何に困難であらうとも、女子の國家社會に對

第三、(最後には、女子の職分はどうか、即ちその女性觀から導かれた、女子の職分の擴張は奈邊まで到るべきであるかを説くのである)

以上、私は女子の性質、家庭に於けるつとめ女王らしさ、及びその教育を論じた。かくて今我等は最後に最も大きい廣い問題に到達した。抑々女子の國家に對する女王的の務めは何であらうか、普通我等は、男子の務めは公共的でも彼れ自身の家庭に關する個人の仕事又は義務があり、その上に更に國家社會に對する公共の仕事と義務とを有するのである。後者は前者の擴張であつて、それが國家社會の事に關して居るのである。女子も彼女自身の家庭に關した個人的の仕事と義務とを有ち且又國家社會に對する公共の仕事と義務とを有する。それはやはり後者は前者の擴張である。もしかその形式が同一であるのではなく。男子の家庭に對する務は、支持を謀り、進榮を司り、防禦を安全

する務は、此處にあることを知り、行はねばならまい。

元來、人の心情の内には、自己のなすべき眞正の義務を盡さうとする本來の傾向がある。この傾向は決して消滅することは出來ないが、この傾向をその眞の目的から側へそれさせてしまふと、それは歪み又は腐敗する。此の愛の本能の緊張したものがある故に、この愛は正當に訓練する時は、人生のあらゆる神聖さを保つのであるが、若し悪く誤つて指導されると、人生の神聖さをば破りくづすのである。そして人はその何れか一方をなさねばならないのである。同じやうに人の心情には、權力を愛する心があるが、誤つて導かれたならば、それを破るるのである。この權力を愛する心は、男にあれ女にあれ人間の心深くに根ざしてあるもので、神はこれを其處に置き其處に保つた。それ故若し或る人が自身の權力を愛する心を責め非難す

るならば、それは無益な馬鹿氣たことである。これは神の目的、人間の目的である。汝はこれに對して汝の希み得る凡てをのぞむが好い。しかし如何なる權？力かこれが全局の問題である。破壊の力？獅子の手足？龍の息？さうではない。恢復の力、救濟の力、指導の力、守護の力、王笏と楯との權力、その觸るゝすべてのものを癒す高貴なる手の如き力、惡魔を縛り捕虜の繩をばゆるめる力、正義の巖の上に築かれた王位、諸君は慈悲の梯子によつてのみ登り得る王位、諸君は斯の如き力を切に求められないか。そして斯の如き王位を探られないか。さらばその人はもはやたゞの家婦ではない。女王である。

我が英國の女子が、レデーの稱號を過分に要求し出したのは既に長い以前からのことである。元來レデーの稱號は、貴族のみに屬した稱號でロード（貴人）に對して用ふべきもの、紳士に對して用ふべきものではない。普通の女子は紳士に對して淑女といふべきのを、レデー（貴女）と言ひならはすやうになつたのは、誤りで

坐に登つて居らねばならぬ。金冠を戴かなくとも常に人の心の女王でなくてはならぬ、汝の戀人、汝の良人、汝の子供に對して女王であらねばならぬ。しかし單に良人や兒女に對して女王であるばかりでなく、この廣い社會に不思議の力を有する女王として、婦人の高尚なる理想を遺憾なく發揮するものであつて欲しい。しかし悲しいことには、女子自身があまりにしばしば怠惰で不注意な女王である、些細なことに王權を握つて喜んで居て、大なる事柄に對して動かすことを忘れ、自分の意志を誤り動かして、間違つた支配や亂暴な仕方を人間の中に行つてゐるのである。

「平和の君」(Prince of Peace)といふ名に注意せよ。王者が此の名に於いて、此の高貴に於いて治める時には、彼等は此の地上に於いて彼等の狭い範圍内に於いて、その人間的の目安に於いて。眞の王者、最上の支配者たり得るのである。神の榮光に依つて眞に支配者たる人々はみな「平和の王者」「平和の王妃」である。女子

ある。しかし私は此の事を責めやうとは思はない。たゞこれを求めた心の内に、偏狹な量見かからの動機の存在するのを非難するのである。女子がレデーの稱を求める希むからには、その名稱によりて示された義務仕事をよく盡さねばならない。その實が盡さればよい。たゞ徒らに美名を求めるならばそれはよくない。レデーは「麵麌を與へる人」を意味して居るのであつて、ロードは「法則の維持者」を意味するのである。そして兩方ともに單に一家内の麵麌、一家内の法則をのみ意味しないで、公衆を維持する法則、公衆に分たるゝ麵麌を意味するのである。それ故男子は王の王たる神の正義を維持して、公衆の安寧秩序を謀る間だけ、ロードの名稱を正當に要求し得るのであり、女子は彼のクリストが嘗て爲した如くに、彼女が多人數の麵麌の供給者となつて、世の憐むべき者を助けて行つてこそ初めて眞にレデーと名乗り得るのである。(中略)そして意識されやうとも意識されまいとも女子たる諸君は多數の人の心の中に於いて、王

の凡てが此の眞の女王、即ち平和の維持者、愛の化身たるの務を盡せば、此の世の中に争鬭や不正の行はれる筈はない。世にこれのある以上その責は女子に歸すべきものである。女子はその天性によつて、争鬭に傾き易いのである。よし争鬭の正しい原因があらうと無からうど、男子は戦ふのである。そこで男子に對して、その原因を撰び、且つ何の原因も存在しない時に、その争鬭を禁止するのは、女子の務である。女子が正當にその務を盡せば、世には何の苦痛もなく、不正もなく、地上に何の悲惨も無くなる筈である。それを現出し得ないからには、その責は女子に歸すべきである。男子は争鬭の光景に忍び得る。然し女子はそれに忍び得ない。男子は彼等自身の奮勵に際しては、世の悲惨事をも同情なしに蹂躪し得る。男子は同情には力弱い。そして希望の爲めには、愛憐の情を縮めてしまふ。苦痛の深さを感じ、それを恢す道を思考するのは、たゞ女子である。然るに多くの女子はこの慘劇を救ひ癒すことを試みないで、た

「目前の惨劇から逃れ去つてしまつて、自身を我が花園の門の内垣の内に閉ち籠めて、その垣の外には全世界が争鬭悲慘の荒涼の内にあるのを知りつゝ満足して居る人がある。垣の外の世界は、自身の知らぬ秘密の世であるとして、敢へてそれに入り込むことをせず、又その苦痛の世界に對して敢て思を寄せるなどをしない女子がある。此のことは私にとつては、實に奇怪なことであると云はざるを得ない。柔らかいやさしい心情の女子が、若し使用すれば、その子を越えて、その良人を越えて遙かに廣く迄、天の空氣よりも清く、地の海よりも強く勤かし得る力を持ちながら、その何物にも換へがたい寶を顧すに、隣人達に伍して無意義の日暮しをしてその力を浪費して居るのを見ては、おどろかざるを得ないのである。更に又かやうに奇怪なことがある。——清らかな天真なその心中に、新鮮な感情を漲らしつゝ、彼女は朝にその花園に下り立つて、培かひ守られた花園の花の、美しく咲き揃つたの眺めて愛で悦ぶ。若しも地

上に俯した花のある時には、彼女の幸福な微笑をその面に湛へ、眼に一點の曇りもなく、彼女はその花の頭を擡げてやる。これは彼女の此の平和な場所の周圍には、小さな垣があるからのこと。若しも彼女が少し心して考へたならば、その小さな薔薇で蔽はれた垣の外には、野の草が遙か遠く地平線につゝくかと思はれる迄人間の迫害によつて蹂躪されて居るのを知であらうに。それを氣づかぬは實に奇怪である。

吾々が最も幸あれと祈る女子の歩む足下に、花を撒布する慣習が昔からある。諸君はそれを單にの慣習の内に、如何なる深き意味のあるかを思料せられたことがあらうか。諸君はそれを單に女子の足を運ぶ足許は、常に美はしい草や花に充たされ、香しい薔薇の花に埋められて、到る處に幸福が與へられるのであると考へられたのではあるまいか。それはさうではない。女子の歩む所にも、恐るべき惡草毒刺が無いとは云へぬ。彼等の足に觸れて軟かに感ずるのは温い花ではなくて、冷い雪であることもある。この古

い習慣の内には、もつと深い意味がある。よき女子の行く道は花を以てか撒れる。しかしそれは彼女の行かんとする前ではなくて、彼女の過ぎた後である。「今過ぎりにし女子の、かよわき足のあとゝめて、花なき原の草叢に、野菊の薰り立ち迷ふ」(テニソンの「モード」の第七章)と詩の句にうたはれて居る。諸君はこれを單に戀人の馬鹿氣な無益な空想であると思はれるか。又同様に次の詩も諸君は詩人の想像であるとのみ云はれるであらうか。「いとし可愛の鈴の花、軽く踏みゆくて女子が、裳の蔭にほゝゑみて、またかくはしき頸をもたぐ」(スコットの「湖上の美人」の一節)うたはれて居る。よし如何に女子を見ることが低くとも、女子はその過る到る處を破壊して行くとは云へまい。彼女は彼女のすぎた時に、鈴の花を倒すことなしに、その花を咲かせるであらう。諸君は私が好んで誇張の言を用ふるをせらるゝか。許せ諸君よ、そんな意味は微塵もない、私は靜肅なる英語で、自己の確信を語るのみである。諸君は亦次の言

葉を聞かれたことがあるだらう。「花はこれを愛するもの、花園に於いてのみ眞に榮ゆ」(シェーレーの「センシティイブ・プラント」の中、*「Flowers only blouish rightly in the garden of some one who loves them.」* 私は諸君がこれを眞なれかしと希はれることを知る。諸君は若しも諸君が彼等の上に親切な眼を濶ぐことによつて園生の花をより輝いた花とすることが出来たら、それは嬉しい魔法だと思はれるであらう否、それ以上に、若しも汝のやさしい眼が力をを持ち、たゞにその花を喜ばすのみでなく、それを守見る力をもつて、彼の「黒き輝き」をあちらに追ひやり、そして節多き毛蟲を除くことを命じ得、早天の時は彼等の上に露の落ちるやうに命じ得、霜のさゆる頃には、「來れ南風よ、我が園を吹いてその香りを漲り出でしめよ」温い南風に命ずることができたら、如何に興味深いことであらう。しかも諸君は此等の草花よりもより美しい花に對して、一層偉大な一層價值多い効をなし得るのである。その花は、汝諸君

が彼等を祝福すれば、彼等も亦諸君を祝福し、諸君が彼等を愛すれば、彼等も亦諸君を愛する。その花は諸君の如き思考を有し、諸君の如く生きて居る。そしてそれを諸君が一度救つたならば永久にすくはれる花である。（人間のこと）その花に對して諸君は美はしい勵をなすことが出来る。これはたゞ小さな力であるとのみいふべきものであらうか。

遙か遠い彼方の荒漠たる沼澤のほとり、確たる岩石の間に、又は恐ろしい市街の暗黒の裡に、凡ての新らしい葉は割かれ、莖は破られて弱り果てた一小花は横つて居る、諸君は彼等の所に走つて行つて、そのやさしい手を下して彼等を助けおこし、彼等の小さい柔らかい土の床に植ゑてやり、世の荒い雨風にあつても轉ばないやうに、堅い竹の籬をつくて保護してやるやさしさと勇氣とを持たないか。朝毎に美はしい曙の光は地上に漲るも、それはたゞ汝等祝福せられたる人々のみに與へられるものであつて、野の薺や忍冬や薔薇の花咲く堤には、その光は

ゆきわたらないものなのであらうか。その曙光は窓の扉を通して諸君をかくは呼び誘はないか。「來れモードよ花園に、蝙蝠のごと影黒き、夜はいつしか流れ去り、清き朝に忍冬や、薔薇の芳香満ち溢る」（テニソンの「モード」の第二十二章）諸君は此の聲を聞いて世の不幸に惱む人々の間に走つて行つて、やさしい心に彼等を慰めて、踏み跡られた野の草が、春の日の光に逢うて新に綠の芽を吹き出し、希望の花を著けるやうに、彼等をその困厄絶望から蘇生せしめるの使命を盡さないか。私は先にモードの一節を讀んだ時に、次の句を讀み落したのを、諸君は氣がつかれたてあらうか。諸君は私がそれを忘れたと思はれたてあらうか。私は今それを茲に讀もうとする。「來れモードよ花園に、蝙蝠のごと影黒き、夜は何時しか流れ去り、われたゞ一人枝折戸の、小かげに立ちて汝を招く」（テニソンの「モード」全前）たゞ獨り、美しい花園の入口に立つて諸君を待つ者は誰れてあらうか。諸君は嘗てマデソンの話を聞いたことがあるか。

い森や小高い丘の間には、狐てさへも棲むべき穴を持つて居るし、空に飛ぶ鳥さへ彼等の息ふべき巣を有つものを。獨り諸君の市街に於いては「たゞ人の子が頭を横へ得べき枕は、我等のみ」と路傍の石が叫ばねばならないのであらうか。

第二、兩論說より提供せられし問題

その内容をよく吟味したいために、以上の如く長々と紹介した兩論說は、我々に向つて考ふべき多くの問題を提供した。今、私はその内から、左の諸項を取り出して、研究して見やうと思ふ。

(一) 女性論の範圍に入るべき諸問題

1. 女性の概念
2. 女子の知性
3. 女子の感情
4. 女子の道徳性

(二) 兩性論の範圍に入るべき諸問題

1. 男女の意味
2. 男女の差異

昔、彼女は朝早く庭に下りて行つた。そして其處に彼女は花園守りと思つた一人の人の居たのを見た。その人は復活せるクリストであつたと云ふ。「自らまわる焔の劍を置いて生命の樹の途を保守り給ふ」といふエデンの園にクリストを見やうとするも、彼れは無益であらう。しかも彼はなほ、此の世の園を守る人として、我が世の園の門口に、諸君の來るので待つのである。

「胡桃の園に下り行き、谷の青き草木を見、葡萄や芽ざし、柘榴の花や咲きしと見回りつゝ」クリストは諸君を待つのである。其處に諸君はクリストを見、それともにその慈愛と救濟との手によつて、小さき葡萄の蔓の延び上るのを見、また手づから蒔いた柘榴の美はしく芽ざすのを見るてあらう。その上其處には數多の天使が降り来て、その翅を以て、クリストの蒔かれた種を拾ふ飢ゑたる鳥を逐ひながら、「我等のために狐をどらへよ、我儕の葡萄園は花盛りなればなり」と叫んで居るてあらう。

オ、汝、女王よ、汝の此の地上の幸多き青

兩性の關係

夫婦論
結婚論

11. 10. 9
 (三) 本務論の範圍に入るべき諸問題
 1. 女子の家庭に於ける職務
 2. 女子の國家社會に於ける職務

- (四) 社會問題の範圍に入るべき諸問題
 1. 家庭に於ける女子の位置及權利
 2. 國家社會に於ける女子の位置及び權利

- (五) 女子教育問題の範圍に入るべき諸問題
 1. 女子の學問受容力
 2. 女子教育の方針及び方法

以上は散文的に論説せられた兩説の中から、各項を取り出して分類した排列である。以上諸問題の各項に對して、一々其の内容を列舉すべきであるが、それは第一論及第三論と重複する故、此處には略して置く。

- (一) 第三、以上の問題に對する批評及び論斷
 1. 女性の範圍に入るべき諸問題
 2. 女性の概念

暗示して居るのでありて、殊にコヴェントリー・バッタモーラの詩は、彼の衷心を代表したものといつてよからうと思ふ。今ラ氏の女性に対する概念の核心を抽出すれば次のやうになるとおもふ。

- (一) 女子は男子のために眞善美を啓示する者、天賦の美はしい心情によつて男子を監督教育するものである。(「指導する職分である。決斷を與ふる職分ではない」とことはつてある)

(二) 女子は人生の慰安者である、女王の力を以て世の悲慘争鬭に泣く人生を蘇生せしむべき使命を有するのである。

(三) 女子はその心情の「柔らかさ」「變り易さ」を以て、太陽の光りの如くに、その照らす凡ての者をして、その者自身の色を顯現させ、それを立派にすべきである。

此の一項を取り出して、兩論を比較して見るとき、直ちに眼につくことは、前者が事實に立脚し、後者が理想に立脚して語つて居るといふこ

シヨ氏の女性に對する概念は、その論文の第二に著しく發表されて居り、さらに第六の初めに少し書かれて居る。即、

(一) 女子は生れながらに、人生の初期即子供の保姆として教育者として働くのに、都合よく適應するやうにつくられて居る。

(二) 女は生涯を通して大きな子供である。女子は澤山の仕事を爲すことによつて還生命に對する負債は爲すことによつて還さないで、苦しむ事によつてのみ還すのである。

(四) 女子は男子に對して、常に忍耐づよく且快活なる伴侶でなければならぬ。

(五) 女子は非美學的の性である。音樂にも詩にも如何なる立派な美術に對しても、眞の感動や知覺をもたぬ。

といふのである。ラ氏のはその第一段の全部に亘つて述べられ、又第三段の諸處に點出されて居る。そしてその概念は彼が例證として引用した詩人文客の作品の總評において、これを

とある。これは序論に於て一言して置いたことであるが、全く兩氏の人生觀、哲學觀等の差異から來たのであつて、殊に此の兩氏の接し経験した女子の差異から起つて居ることである。それ故に以下諸項の批評にもつねにこれを前提として考へにおかねばならぬ故、先づ最初にそのことについて一言しておく。シヨ氏は哲學者である。意志哲學は彼によつて新に創設せられたのである。彼は美を以て愛を以て凡てを觀て、その朗然たる蕩然たるものに酔うて夢をよろこぶ趣味の人ではなかつた。彼が美を説き愛を説く背後には常に銳い哲學觀が潛んで居た。眞は彼の生命であり安立であつた。それ故に彼が眞と見る厳格な哲學的宇宙觀が、彼の觀する凡ての事物現象の色彩をなすのであつた。されば彼は想像をはたらかせて産みだした想念上の偶像をよろこんだり、柔らかい感じに酔うて満足したりすることはできなかつた。それに加へて彼の母は、所謂貞操な婦人でなかつたその愛を感じ、その美に抱かれて、母に向つて

のみは批評の態度に出づることができないくなると云ふやうに、彼を撫育するには、彼の母はあまりに蓮葉者であつた。家を外にして遊んで歩いた。私行上によくない黒い影もあつたといふ。彼の母は美しくない行爲を見せつけて批評的な彼の心に、その女性觀の第一歩を固くさせさせさせた。斯くてショーフ・ベンハウエルの女性觀はつねに批評的で且冷笑的なのである。ラ氏は文學者である。詩人である。美學者である。直覺を以て銳く自然の懷に突入して、その美と愛の中に、生命を見出した人である。その「近世畫家」によつて「建築の七燈」によつて、舊來の美術批評を一變した程、批評眼にも長じて居た。しかし幼きより嚴格な父と貞淑な母との膝下に、バイブルに親しんで育てられた彼の胸には、つねに美に憧憬する心と愛に歡喜する情とが湛へられて居た。凡てを冷然と第三者の位置から觀察して、哲學的考察に耽るには、彼は柔らかさにすぐる心を有つて居た。彼が晩年に於いて社會改良の爲めに身命を堵して奔走したこと

においても、彼の宇宙觀、人生觀の如何なるものであつたかは窺はれる。彼はあらゆる自然と人生とに、美と愛とを見出さずには居られない。そして彼の母は富裕なる英國紳士の妻として、淑女の範たるべき良き人柄の婦人であつた。斯くてラスキンの女性觀はつねに讚賞的の且つ同情に富んだものとなるのである。前述の兩論文を一讀された諸姉は、その著しい相違の因ておこる所を、是によつて肯定せられることゝおもふ。

さてこれから、女性の概念について兩者を比較して見やう。シユ氏の一及び二は心理學的に或る證明を與へ得べきことであつて、兒童と女子との類似はその筋肉組織の纖弱なことにおいても、推理や判断の主觀的に行進することにおいても、個性において「女子」と「子供」とに「多血質」「神經質」の多いことにおいても、その他種々の點において認められて居る。しかしさうまでいはずとも、よく一口に「女、子供」と世間の人は云ふ。男子がいふばかりでなく婦人自身

もこれを云ふ、科學は既有的事實に解釋を與へるものである。自然の類似は直覺的に人々の頭に「女、子供」といふ同類概念を形成して居る。否定し得ない事實である。私はこの(一と二と)を否定しやうとせぬ。事實として肯定する。しかしその肯定する底には、女子を輕視する意味を置きたくない。女子の貴い天分を果さすために、自然が女子をかやうになしたと考へたい。シユ氏はすべて女子の存在を種の繁殖といふことから考へて肯定して居る。自然の意志のあらはれといふ。つきとめての考はそこに一致しやう。しかしその最後の考だけをむき出しに考へて、すべてのうるみとゆとりをなくした見方をしたくない。やさしい微笑を伴つて、一をも二をも肯定したい。これをラ氏の一と比較して見ると、大いに、その考へのあらはれの異なるのを知る。ラ氏は、女子は宇宙の眞善美を人生に啓示するものと考へた。そして、男子對女子といふ立場から女子を見たのである。シユ氏は人類對女子といふ立場からこれを見た。私はラ氏の一

をも肯定する。但し女子が此のプライドをもつてゐることこそそれ、それは極めてハムブルな心情の奥に秘めて修養向上のための信條とするのであつて、決して鼻の先きにぶらさげての自慢とすべきでない。シユ氏のは現實の女子を見るときの微笑となり。ラ氏のは理想の女子を語る時の強みとなる。シユ氏の(二)はラ氏の(三)と比較して見るとおもしろい。シユ氏は女子は多くを爲さぬこいうた。ラ氏は女子はあらゆるものにそのものゝ色をあらはさせるといふ。現實の目立つての仕事を多くなさぬは事實かもしけぬ。しかし目立つての仕事を多くなさぬのであつて活動の分量は容易に比較し得まいと思ふ。これは全く異なる性質の黄金と薔薇とをもち出してその絶對的の價値を比較するのと同じであらう。しかしシユ氏は女子に反省を與へる。シユ自身はた、批判しただけであらうけれども。ラ氏は女子が人の心をいかに動かすかを語つた。男子をよく知らぬ私は、女子が如何に男子を動かす

五十六

か動かさぬかを知らぬ。しかし年高き立派な或る婦人が、女子が如何に男子を左右するかを聞かせて下さつた。私はそこまで立ち入らずとも清く美はしいおもひやりの心、なきもつ眼が獨つた影を伴はずと、人を美しく鼓舞さするものとなつたら、女子のために如何に嬉しからうともふ。立派な人格を有たれる男子は、たしかに我等に敬仰と讃美との念をおこさせる。立派な人格の女子も亦男子にさう仰がれやう。ダンテにやさしかりしボルチナリの清い同情は凡ての女子の心情に満へられて居て欲しい。獨り生れて獨り死ぬると、背き果てるばかりが、此の世の觀方でもあるまい。人と人とのつながり、心情のうるほひどうるほひどが、如何に我々の心をうごかして居るかは、小説に泣く人演劇に我を忘れる人、忙しいひまを割いて講談聞きに行く人の多いのにも知られやう。一切の人々の眞面目なる衷心の奥の奥をのぞいた時、そこに可憐な涙のかたまりを見るであらう。孔子も「鳥獸は群を同しうすべからず。斯の人の徒ども」

はり、心亂れず仕事をつゝけ得たならば」と、高潮に達した心緒のうおきをかこつ時もあらう。「白きにつゝむ七いろのあや」と、女子の胸はありたいと、これも我が美しい友の言葉であつたかやうな意味で人はお互にせち辛い世の苦しさ悲しさを忘れて行き得るのである。ラスキンのノーブルな心緒のさゝやきは、その女性觀の(三)において、著しく女子としての私の心をうおかした「罪多き男子こらせと肌清く黒髪長くつゝ意地を見て嬉しかつた私は、一層おだやかな一層清いラスキンの女性觀に泣くばかり悦んだ。遙つた心の底に此の覺悟を有つ娘を育てたい。ラ氏の(二)は云ふまでもなく、女子の心すべきことである。そしてそれはたゞ女子の清いほこりとばかりでなく、我々女子の知らぬであらう處に努力し奮闘して、泣くべきをも泣かず、雄々しくすべてを覆して健全な戰鬪をつゝけて行かれる男子への、せめてもの報恩として、女子は此の心からのやさしみをそなへて居たい。私は

常に人一人の身に積まれた又心に刻まれた悲惨辛苦のあとのどれほどであるかは、とてもその人自身でなければ、測り知られぬものと思うて居る。美はしく咲いた薔薇の一輪を見た時にはまずその開花に至るまでに、如何にその蕾が霜を凌ぎ根が堅い土を分けて人知らぬ苦心をしたかを思ひやりて、涙を濺ぎ感謝をする心持ちがおこるのである。人知らぬ處に泣き人知らぬ處に苦しんで、あらゆる悲惨事とたゝかつて、一を以て貫いて作成した或るものに、「あれは天才だもの」との一言をあびせて、あとは無責任な批評を敢てして何とも思はぬ無情さを、世に荒なる故に、女子自らが高くなり良くなるために努力しやうとこそすれ、男子と對立して女子を凌がねばならぬなどとは、どうしても考へられぬ。むしろ女子なるが故に、女子には私どもに判らぬ偉さや苦しさがあると思つて、その判らぬ偉さ苦しさに報ゆる唯一の道は、たゞ我等が心情をつくし、その注文に應じた道で、これを

もにせずして誰を與にせん」と窮路を尋ねて諸邦をめぐつた。ソクラテスも我等のみのためでなしに、辻に人と語つた。五衛門でさへが油の煮えたつまでは、子供を釜には入れなかつた。孔明は蜀の先主の知に身を捧げた。「打てば響く打ち響かぬは破れし心をつくらはうともせぬ人うちて響くそれは事實。それのみならぬ澄み渡る其の音と、いづこに消ゆらん無量の思をのせたる餘韻の願はれしための苦しさ」と、心の純なる友は或る時泣いた。天真の銳さは此所まで行かねば誠であるまい。清冽な心情を強烈に動かして、一は一にあたるので無くては堪へ得ぬが、誠かも知れぬ。しかし多事に觸れ多端に接して行かねばならぬ人の世には、又一々のことにして淡く動いて無限に通ふ心情がなつかしく欲しいことであらう。「我が身は木や石ではない。あゝ此の想此の胸の中」と、やるせない日もある。一時計が機械かのやうに何も感することのない胸を有つたらどんなに、うれしから、ただ捩をまかれただけで、永久に針のうおき、車のま

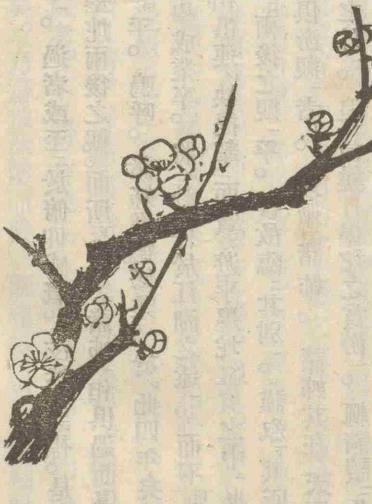
たすけ慰めねばならぬのだと思つて居る。そして此の意味に於いて、私は絶對的の心情を以つて女子は男子に仕へるべきであると思ふ。それで女子は男子に仕へるべきであると思ふ。それ故、シヨ氏の四は、女子として私は斯う考へて居たいと思ふ。しかし男子からの要求としては反抗する氣は決しておこらぬが、よく「女子と小人」といふやうな考へ方、女子は玩弄物といふやうな考へ方をして居られる男子の同一轍を踏んで居るかのやうに思へた。男子の聲として(四)を聞かすとすむやうに、女子自らの心の持ち方と實質とがすぐまねばならぬ。シヨ氏の五に對しては、私は反対を言ひたい。但し一般に心のカルチャアせられぬものは、美や藝術やに對して眞の大なる感動や細かい賞讃の心やはおこらぬものである故に、自然的に直覺的に天地の美や藝術の美や人情の美に動かされることはあるとしても)女子の教育がひく、その智識心情の開發の至らぬ間は、女子が音樂や詩やその他の藝術に對して眞の感動をおこさないかもしだれない。しかしこれは「女子」なるが故てはあるまい

式部の筆、柔弱かもしだれぬ、多情多恨の誹があるかも知れぬ。しかし誰れか彼の夕顔の一生の淡いあはれを詩と見ぬ人があらう。野の宮の竹のそよぎをかなしと聞かぬ人があらう。霜さゆる朝に少將の「あけくれ」の詠、また脇を断つものが有る。さらに又少納言の筆に「おい此の君に」「雪の山」「手の赤かりし今まゐりの夜、忘れられぬ影を千載の後の人の心にも與へる。」葉女史は若くて逝きしも「みどり」や「信如」やはれ、無い想、感じないことは筆の先からつくはり出し得ぬ。與謝野氏も現代の詩人として尤なるものは、世が許して居る。畫家には外國にロザボニールの如き人もある。知ること少き我等の聞かぬ所にも大きい感動を女子がもつ證據を語る人は多からう。少數のどりのけは多數の命をかへぬとの説にシヨ氏は賛して女子は非^モ全体の美術に對して大なる感動性を有つとは云はれまい。要するに此の論に對しては、私はシヨ氏の命をかへぬとの説にシヨ氏は賛して女子は非^モ全体の美術に對して大なる感動性を有つとは云はれまい。

理想といふものは極狭い範圍に限られて居るとも居ないとも言へ得ぬが故に決論を下し得ぬと言ふをとりたい。そしてあくまでもこの感動不感動のことは「女子なるが故に」でなくて「耕される」と「耕されぬ」とにあるものと主張したい。但し女子は一般に些々たる感情に醉はされやすいは事實であると、事際の經驗からおもふ。感情の強いうきのためには哲と聰明とを失つて、悲しい見苦しさを見する時もすみぶんあるとおもふ。それ故に、「ある一つの強い感じ」が、所謂眞の感動の邪魔をすることなどは確かに男子よりは多からうとおもふ。

以上「女性の概念」に對するシヨ氏の論は反省の資料となり、ラ氏は理想の内容である。

(未完)



(2) 女子の知性
これに就いてはシヨ氏は第四に多く語り、第六に少し語つて居る。即ち、

(一) 婦人は精神能力に於いて男子よりも早く成熟するが、その代りその精神、能力